

SDGs未来都市ふくつ 人も自然も未来につながるまちづくり 【令和2年度】



SDGs (エスディーゼーズ) とは？

SDGsとは、2015年の「国連持続可能な開発サミット」で合意された、2030年までに取り組むべき経済・社会・環境をめぐる世界共通の目標であり、誰一人取り残さない社会作りを目指しています。

右下のアイコンでは、貧困、ジェンダー、エネルギー、働きがい、経済成長、気候変動への対策などの17の目標を示しており、各目標には具体的な内容を示した169のターゲットが掲げられています。

SDGs 未来都市ふくつ

- 中長期を見通した持続可能なまちづくりのため、地方創生に資するSDGsの達成に向けた優れた取り組みを提案する都市を「SDGs 未来都市」として、平成30年度から国が選定しています。
- SDGs 未来都市の選定要件として重要なポイントは、経済・社会・環境の3要素に相互関係を持ち、バランスよく好循環を作りながら持続可能なまちづくりを進めていくことにあります。



福津市が取り組むSDGs



経済

福津市の価値ある資源を生かして
経済面を元気づけよう



新鮮な地産品



福津市が誇る
白砂青松の景観

- Keyword ●
- ブルーツーリズム
- ラーニングツーリズム
- 社会的ファイナンス

相互連携 相乗効果



幸せのまちづくりラボ
地域の課題解決に向けたプロジェクトの組
成・支援を行うイノベーションセンター

自然環境や歴史的町並みを守り、蘇らせよう

世界文化遺産に登録された
新原・奴山古墳群



- Keyword ●
- 再生と保全
- 空き家再生
- 学び場の提供

津屋崎千軒の歴史的町並み



環境



社会



福津市を盛り上げる人材を
育成して地域を活性化しよう

- Keyword ●
- 担い手育成
- 人材育成と活躍支援

プロジェクトを通じた
地域人材の育成



福津市とSDGsについて
学ぶ出前講座



相互連携 相乗効果

相互連携 相乗効果

令和2年度幸せのまちづくりフォーラム 特別講演：新型コロナ後の地域社会とSDGs



令和2年度は、SDGパートナーズ有限会社の代表取締役CEO田瀬和夫さんをお招きしました。SDGsに関連する世界情勢、SDGs2030アジェンダの構成とSDGsを理解する上で重要なポイント、SDGsを企業戦略に取り入れ始めた大手企業の紹介、17ある目標の中で今日本にとって最も重要で、早急に進めなければいけない取り組みなどについてご講演いただきましたので、その一部を紹介します。

田瀬さんの略歴として、会社設立前は外務省に入省し、国連政策課や国連日本政府代表部一等書記官等を歴任。緒方貞子氏の補佐官として「人間の安全保障委員会」事務局勤務。外務省退職後は、国連連合事務局・人間の安全保障ユニット課長、国連広報センター長。国連退職後はデロイトトーマツコンサルティングの執行役員として手腕を振るわれたのち、2017年9月に独立されました。



2030年アジェンダとは、
「2030年、我々はこういう
社会を自分の子どもたちに
引き渡したい」
とした、非常に簡単な目標
を持った文書

2015年9月25日に国連総会で決議された「持続可能な開発のための2030アジェンダ（通称：2030アジェンダ）」では、国際社会が戦後1945年以降、「人・地球・平和・平等」などに注力してきた中で、地球の状態が良くないことに気づいたことから

「**将来の世代から借金しない世界**」

にしようと唱えた。

これを「サステナビリティ」と称する

SDGs2030文書は、当時193あった

●●●
国すべての同意を得られ、全世界
が一つのビジョンに合意できた

「**奇跡**」

皆

でこの旅をはじめるとあたり
我々は誰一人取り残さない

(前文第2段落より)

過去30年、国際社会が経済成長を求めすぎた結果、大きな富の集中や格差を生んだ。また、経済成長以前から社会に参画できなかった少数者がいる。この反省を持って、すべての人が参画できる社会を次世代に引き渡さなければいけないというSDGsの想い。

一 層大きな自由

(前文第1段落より)

世界に目を向けると「自分の将来を自由に選択」できない人が多くいる。生まれた国や環境によって住居や栄養、生命でさえも自由にできない人がいる。自分らしい人生をすべての人が送れるように、というSDGsの想い。

SDGsを理解する 4つの想い 前文と宣言文に注目

全

ての生命が栄え、全ての人が身体的、社会的、精神的にもよく生きられる社会 (宣言文第7段落より)

1946年にWHO (世界保健機構) は「健康とは、肉体的、精神的、社会的に満たされている、ウェルビーイングである状態」と定義。人生、経済、果ては世界をも変えると言われているウェルビーイングな社会を目指したいとする、SDGsの想い。

フ

ューチャージェネレーションズ

(前文第4段落「惑星」より)

現在のみならず我々の後にくる全ての人たちのニーズを満たすためには、自然環境の保全を引き継いでいかなければいけないというSDGsの想い。

SDGsに合意したすべての国（当時193カ国）は、

「世代を超えて = フューチャージェネレーションズ」

「すべての人が = 誰一人取り残さない」

「自分らしく = 一層大きな自由」

「よく生きられる = ウェルビーイング」

そんな世界を目指しています。

SDGsの世界観を実現する方法は、17のゴールに対し数値目標を個別に定めることだけではないのではないか。付加価値のある思考・考え方が必要なのではないかと思ひ、経営として利益に繋げながら組織を良くするための実装論を構築してきた。



SDGsの世界観に共感し、この世界を作るために自分は何ができるのか
SDGsを理解することが、取り組みを進める第一歩

近年ノーベル賞を取った世界食糧計画（WFP）の取り組みである貧困農村への学校給食支援は、SDGsドミノを引き起こす。

学校給食

子どもが給食を食べに学校へ来る

栄養が改善

子どもの元気が出る

子どもが読み書きそろばんする

国の学校に行くこどもが出始める

高い給料の職に就く可能性が増える

貧困からの脱出

その他の好連鎖反応

- 給食事業導入による食料生産者の所得向上
- ストリートチルドレンの削減による治安の向上

社会課題の連鎖反応 = SDGs ドミノ

新型コロナウイルスがもたらす負の連鎖

ポストコロナ社会にSDGsが出来ること

負の影響を受けた
人たちの社会参画
推進を後押し

自律分散型社会
を推進すること
で地域の発展を
後押し

社会の底力を鍛
えるため、新しい
雇用形態の推
進を後押し

大量生産大量
消費から少量
多品種の持続
的な形へのシ
フトを後押し

地域の中でヒト
モノカネの資源
を回す、自立的
好循環を後押し




育児は「負担」だろうか



育児は、人間が喜びと学びを得られる貴重な体験であると思う。しかし、日本社会においてジェンダー平等を問うことに対する根本的な問題は、我々がプラスであると観念すべき価値に対してマイナスのラベリングをし、結果的に社会も経済も回すことができていない事実に対し、一刻も早く気が付くべきではないだろうか。

日本の女性が正當に、適切に労働市場に参画すれば、
日本の経済は人口減少にも関わらず活性化する



今の子どもたちに
10年後どういう世界を用意できるか
今社会をつくる世代に課せられた課題である
SDGsを自分事として

第2回 ふくつSDGs賞表彰式



SDGs 推進本部長賞

福間中学校

上西郷小学校

福間南小学校

くらげれんごう

特別賞

福間小学校

チーム53



第2回ふくつSDGs賞表彰式



第2回ふくつSDGs賞選考委員をご紹介します。



福岡教育大学教授
石丸 哲史 さん



福岡テンジン大学学長
岩永 真一 さん



西日本シティ銀行
執行役員広報文化部長
小湊 真美 さん



九州大学 助教
下村 萌 さん



(公財)地球環境戦略研究機関
プログラムディレクター
林 志浩 さん

福間中学校の松林保全の取り組み【SDGs推進本部長賞】

本校は、平成21年度から大々的にコミュニティスクールとしての準備をはじめ、22年度には6回の運営協議会、23年度には当時の金子教育長と柴田校長にコミュニティスクール指定書が手渡され、家庭・地域に学校が共通の問題意識を持ち、知恵を出し合い、力を合わせて子どもたちを育てていく、ふれあい一杯の取り組みを進めていこうという理念を持って、正式にコミュニティスクールとして稼働しました。今回応募しました「地域の方々と共に取り組む、松林保全活動の担い手から創り手へ」は、24年に弓道部が花見地区の松林清掃活動に参加したことをきっかけに、25年度からは1、2年生の全員が総合的な学習の時間で本格的な活動をスタート。その後、生徒会と美術部が共同で案内板や鳥の巣箱を設置するなどの活動を行い、現在でも継続的な活動となっています。



本校では、事前学習として道徳やふるさと学習の中で松林清掃の意義や歴史にも触れ、学期ごとに各学年が、総合的な学習の時間に松林保全活動を行っています。福間郷づくりの環境景観部会の方に手取り足取りご指導いただきながら清掃活動に取り組んでいますが、学年が進むにつれ、各自方法が身につき、より主体的な活動ができるようになりました。地域への恩返しの意味も込めて、休日や夏休み中のボランティアを募りましたが、昨年度は松林保全活動だけでも180名、その他の活動を含めると900人以上が参加しました。今年度はコロナが沈静化した10月よりスタートさせましたが、それでも23名が松林保全活動に応募するなど、授業として取り組んだことが発展している様子が見て取れます。休日のボランティア活動には、一般の方も多数参加していますので、大人と関われる貴重な場となっていますし、小学生も多数参加しているので、児童のお手本になるなど新たな役割を持つことが出来ます。参加した生徒は、「地域の方々がいるからこそその松林だと思った。福津市の宝である松林を保全するために何かできることがあれば、心を込めて取り組んでいきたい。」や「今まで当たり前だと思ったことは、多くのことが地域の方に支えられている、これまでボランティアとは誰かのために尽くすものと思っていたが、自分のためでもあるとこの3年間でわかった。」と感想を述べていました。現段階では、地域の担い手の育成に留まっていますが、今後2030年までには中学生がアイデアを考え、卒業後も地域とつながる人材となり、さらには創り手となれることを目指していきたいと思えます。





福間中学校について

コミュニティスクールという枠組みで地域と一緒にやっていくところが大きなポイントです。力の入れ方、覚悟の度合いの本気度が、学校全体というところで見ることができます。



Ishimaru

小中9年間を通して同じ活動をしています。小中一貫して毎年題材を変えていくよりも、一つのテーマに毎年取り組み、その過程の中で視点が変わる、貢献できる立場が変わる、というような形で継続性を持たすところが素晴らしい視点だなと思っていました。



Hayashi

次の視点!

松林が地域にとって“どのような宝なのか？”を生徒に定義させ、そのために何をすべきかを、もう少し前広に学び、議論させる機会があってもいいのではないかと感じました。中学生の学びなので、松林を“保全する”ボランティア活動だけでなく、松林を活用するアイデアが生まれ、新しい実践の機会が生まれるかもしれません。

上西郷小学校6年生のユニセフ募金の取り組み【SDGs推進本部長賞】

私たちは総合的な学習の時間で世界の子どもたちのこととSDGsを学びました。当たり前のように私たちは毎日食事をとり、学校に行って友達と勉強しています。でも、世界に目を向けるとそれが当たり前ではない子どもたちがたくさんいることに驚き、胸が苦しくなりました。私たちがどれだけ恵まれていて、幸せかがよくわかりました。また、ユニセフ活動を知り、取り組みの素晴らしさを知りました。同じ人間として、自分たちにできることがないかクラスで話し合い考えました。厳しい状況の子どもたちを健康で安心して生活できるようにするために、SDGsの取り組みとしてユニセフに募金することにしました。募金額は、600人分の栄養治療食と1,200人分のワクチンの4万円を集めて募金することを目標に決めました。



私たちは達成するために2つの活動に取り組みました。活動のひとつめはアルミ缶集めです。週4回集めたアルミ缶はお金に換えてもらいました。アルミ缶は最終的には126kg7,800円になりました。活動のふたつめとして、ふれあい祭りでバザーを開きました。バザーの売り上げはすべてユニセフに募金し、世界の子どもたちを一人でも多く笑顔にしたいと思い頑張りました。火曜日と木曜日に不用品集めをし、集めた布でマスク、ティッシュケースなどに心を込めてリメイクしました。本や文房具を集めたり、大根を栽培したり、校庭の銀杏を拾ってバザーに出すことにしました。

ふれあい祭りで、たくさんの方にこの取り組みを知ってもらうためにはどうしたらいいのかをみんなで話し合いました。まず「知ってもらうこと」が大切だと思い、ポスターの掲示や家庭への手紙を配布しました。さらに、ふれあい祭りの学年発表で、学んだことを知らせ、保護者や地域の方への協力を呼びかけました。その結果、バザーでは多くの方から協力を得ることができ、私たちが目標とした4万円を集め、ユニセフに募金することができました。

私たちはこの取り組みを通じて、たくさんのことを学びました。世界の子どもたちの中には、学校に行きたくてもいけない、病気で苦しんでいる子どもたちがたくさんいるということ、そして、協力してくれる上西郷小のみんなや家族・地域の方がいたからこの取り組みを達成できたことです。反省点もありましたが、みんなで協力できてよかったです。SDGsの目標とこの経験を忘れず、周りの人への感謝と困っている人に手を差し伸べる勇気を持ち、今後もいろんなことに挑戦していきたいです。





上西郷小学校について

小学校や身近にある資源を使って活動を展開している点が素晴らしいと思います。また、10年以上継続して活動を続けてこられたことも高く評価できます。



Shimomura

寄付の原資が、自分たちの資産を活用し、実際に汗をかい得た対価を寄付するという仕組みを、小学生が学び・実践できることに大きな意義があると感じました。



Kominato

次の視点!

児童が行ったことのない貧困地域のために活動をすることも大きな価値がありますが、一方で身近なところで福津市には子ども食堂などに見られる貧困も潜んでいます。貧困やジェンダー問題など身近に隠れている社会課題に焦点を当てることで子どもはより自分事に感じられるのではないかと思います。

福間南小学校の上西郷川と共に生きる取り組み【SDGs推進本部長賞】

左下の写真は4年生の「未来につなごう自然いっぱい、上西郷」の様子です。昨年度までは4年生だけが上西郷川について取り組んできましたが、本年度から全学年に広げ、学校として系統立てたカリキュラムを作成しました。4年生では、日本一の里川を目指す会と九州大学の方のお力を借りながら、「私たちの上西郷川を調べよう」、「上西郷川の過去をたどろう」、「上西郷川を守り、未来につなげるためにできることを考え、実行しよう」という3つの課題を連続させて実践しています。上西郷川を守り続けてきた人々に愛情を持ち、上西郷川と共に生きる地域の一員として、自分にできる継承の取り組みについて考え、実行できる人材を育てています。このことはSDGsのターゲットとして、陸域生態系・淡水生態系の保全回復、絶滅危惧種の保護につながります。



中央の写真は5年生が取り組んでいる「災害に備える」の様子です。4年生での実践を受けて、5年生は福津市防災安全課の方から話を受けて、福津市の防災マップを基に自分たちの目で住宅地を見て情報を収集し、地域ごとの防災マップを見直し、オリジナルの防災マップを作ります。一人一人が自分の家族の避難ハンドブックを作成するという実践を行います。想定外を意識したハンドブックを作成し、危機意識を高め、地域を守る人材を育てています。これらはSDGsのターゲットとして、水、関連災害による死者数や被災者数の削減、関連災害や自然災害に対する強靭性及び適応能力の強化につながります。右下の写真は、グリーンインフラ・ネットワーク・ジャパン2020にオンラインで参加した様子です。全国の川遊びに関心がある方とオンラインでつながり、3年生から5年生児童が参加しました。児童自ら学習中の写真や成果物の資料を指で指し示しながら、一人一人が上西郷川と福津市に対する思いや考えを堂々と発表しました。参加されていた全国の皆様からたくさんの励ましの言葉をいただきました。

今後は、福間中学校ブロックの松林清掃の学習との連携や、上西郷川下流の福間小との連携、さらには、ブロックは違いますが西郷川上流の上西郷小学校とも連携していきたいと考えています。





福間南小学校について

環境・地域、そして防災にもつなげており、ジャンルを超えて地域にも還元する点が素晴らしいですし、防災に持って行ったところが、良いアウトプットだと思いました。



Iwanaga

上西郷川での活動、そこからみえてくる持続可能性。上西郷川は教科書みたいなところなので、そこを題材にいろいろな活動をしている点、まさに他市・他地域へのモデルになる活動だと思っています。



Ishimaru

次の視点!

非常に良い学びの場が創出されている分、実践の幅が少し限定的かな？と感じました。実践のアウトプットを、生徒や家族だけでなく、地域のみなさんと共有できるようなものを検討されてもいいのではないのでしょうか。それくらい高いポテンシャルを秘めた良い学びの場が創出されていると思います。

くらげれんごうの日本一ハードルの低いビーチクリーンの取り組み【SDGs推進本部長賞】

私たちは日本一ハードルの低いビーチクリーン活動をしています。もともとは海岸清掃の団体ではなく、海が好きすぎて仕方ない私が、たくさんの人と海で遊びたいと考え、SUPやイベントをして家族や友達を遊んでいたのが始まりました。ビーチクリーンのきっかけは、福間海岸には桜貝が落ちているので、友達にアクセサリーを作ってもらおうと拾っていたら、一件大きなごみのない福間海岸なのですが、小さなプラスチックが落ちているのに気が付きました。「これがマイクロプラスチックか」と思い、それを見と一緒に拾い始めたのですが、一人で拾っていても埒が明かない、夕暮れ時にはカップルや家族連れが海岸にたくさんいるので、みんなで拾えばもっと減るのではと思い、始めました。



右下の写真は友人に作ってもらったキーホルダーチャームなのですが、福間海岸で拾ったマイクロプラスチックが入っています。ビーチクリーンをしてくれた人にプレゼントをするために、サーフショップやカフェに協力をお願いして、「ゴミ拾ったよ」と持ってきた人がいたら差し上げてくださいと伝えてあります。または、私は天気のいい季節はかなりの頻度でビーチでご飯を食べているのですが、海岸を歩いている人に「ビーチクリーンしてみませんか?」とナンパをしています。去年は4月から11月くらいまでで約1,000個のチャームを配ったので、1,000人くらいの方がビーチクリーンをしてくれるきっかけになったと思っています。

自分でいきなりビーチクリーンを始めるのは「ハードルが高い」と思う人もいると思ったので、イベントも開催しました。真ん中の写真ですが、私自身が海で楽しむのが好きなので、真面目にビーチクリーンだけをするのではなく、何か楽しいことも一緒にしたい。例えば、ビーチクリーンに参加してくれた方は足湯に入るとか、ボディペイントができるとかしました。右下の写真はとても良かった取り組みなのですが、お家に眠っている服を持ってきてもらい、スタイリストに服の組み合わせを考えてもらうこともしました。これは人もハッピー、ものもハッピー、海もきれいになってハッピーでした。70人くらいの方が参加してくれました。

ビーチクリーンのハードルを低くすることで、今まで実践したことのない人たちが始めるきっかけになったと思います。今後としては、拾ったプラスチックで子どもたちと一緒にキーホルダーも作っていますし、環境教育もやっているので、この機会に今この場にいらっしゃる学校と良かったら連携したいと思います。学習の一環として取り入れてもらえたらうれしいです。参加者の多くが市外の方が多く、なかなか市内の方の参加を促せていませんので、是非この機会に市内の方と一緒に活動できればと思っています。





くらげれんごうについて

嫌々ではなく、自分事としてとらえてやっていることが本当によく見えました。そういう意味では、実際のSDGsに向かう方向性・姿勢は高く評価できると思いました。



Ishimaru

「楽しむ」というコンセプトを前面に打ち出していて、活動は楽しまないと続かないしモチベーションもあがらないので、そこを表に出していろいろな人に声をかける点が大きなパワーだと思いました。



Shimomura

次の視点!

ビーチクリーン活動と小中学校での教育プログラムとの連携について、今後の展開を非常に楽しみにしています。福津の海は福津の財産であり、福津の海を通したSDGs教育が進むことに期待しています。

福間小学校6年生の外国人も笑顔にする取り組み【特別賞】

現在福津市は人口が増え続けています。その中で外国人も増えていることに気づき、何かできることがないかをクラスで考えました。そして、世界スマイルプロジェクト「福津市に住む外国人も笑顔に過ごすことが出来るまちづくり地域づくり」をしていこうということになりました。左下の写真は、外国の方をベストティーチャーとしてお招きし、国の特徴を話していただきました。子どもたちは二つの国について事前学習を行い、話を聞くことでさらに興味関心が高まり、もっと相手の国のことを知りたい、福津市の良さを伝えたいという想いが芽生えました。



特に子どもたちが興味を持っていたことは、「外国の食文化が日本と違うため日本では何を食べているのだろう」ということでした。また、外国の方から「福津は好き、住みやすい」という声がありましたが、実際に困っていることもたくさんあることも教えてもらいました。具体的には「ゴミの出し方がわからない」や「公共交通機関を使ったときに行先を間違えてしまって頼れる人がいなかった」などでした。中央の写真は、世界スマイルプロジェクトの学習の流れ図です。子どもたちはSDGsを復習し、「誰も取り残さない社会をつくる」ということを口にししました。5年生の時は障がい者や高齢者、環境にスポットを当ててSDGsを学習しました。6年生の学習の際に、「誰も取り残さないって誰のことを指すんだろう」と疑問を持ち、今まで学習してきた高齢者や障がい者だけではなく、子どもや外国の方もいることに気づき、外国の方にスポットを当てることにしました。相手の国を調べるによりお互いの国の良さや特徴を知りたいという声が生まれました。調べ学習をし、実際に話を聞くことで、自分たちが誇りに思っている国を汚されたり壊されたりすると悲しい気持ちになるということに気づきました。右下の写真は自分たちで調べ学習をし、外国の方に伝えるための発表会をした様子です。6グループが外国の方にも分かりやすいように資料を作成したり、パンフレットを準備したり、相手のことを思って準備しました。子どもたちの発表のあと、フィリピンとアフガニスタンの方から「福津市をさらに詳しく知ることができ、もっと好きになった」と感想をいただきました。

学習活動を通して、子どもたちは相手の国を知るだけでなく自分が住んでいる地域を把握し、お互いの良さを認め合うことで、みんなが笑顔に過ごすことができるまちができることに気づきました。街中で外国の方にあったら挨拶を試みようや、困っている人がいたら勇気を出して声をかけようと前向きに考えることができました。実際に、外国の方が困っているのを見かけた児童が勇気を振り絞って声をかけ、助けることが出来たと言っていました。





福間小学校について

外国人の方との交流という他の学校にない取組であったのと、普段なかなか外国人の方と交流できない中で、そこに着目して取り組んでいるところに魅力を感じました。



Kominato

人種の多様性を取り上げている福間小学校北山先生班の提案は、これからの福津市の未来を考えるとおそらく海外の方もたくさん入ってくるので、子どものうちから触れ合えるというところですごく発展性がありいいのではと思いました。



Shimomura

次の視点!

「なぜ日本に来たのか？」の社会的背景や、逆に、日本人が外国で働いている視点なども学べると良いと思います。今は、多様な人々を理解する、という段階だと思いますが、今後、生徒が主体的に考え、アクションを実現するところまでフォローできると、生徒にとっての学びや自信にもつながると思います。

チーム53の高齢者宅の塵回収の取り組み【特別賞】

チーム53とはなんぞやとよく言われます。宮司地区にお住いの高齢者のゴミ分別を担っていて、地元の方から「ごみ隊」と呼ばれています。この活動ももう17年目になります。リヤカーの写真がありますね。まず、組長さんから高齢者や障害者の名簿を上げてもらって、名簿に基づき同じ時間・同じルート・同じ顔ぶれでゴミ回収しています。当然、ゴミ集めが大事な仕事なのですが、高齢者の安否確認も兼ねていますので、17年間、同じ人が同じお家へ150回以上回っている計算になります。同じ顔触れだから安否確認がものすごくしやすい。同じ時間に来て同じ人がチャイムを鳴らせば、高齢者の方は分かります。違う人が来たら変なセールスじゃないかとなるので、非常に効率がいいです。



発足したのは2名から4名くらいの地元の有志でした。それから、高齢者が増えたこともあり、ソフトボールチーム同好会なんかを取り入れてきました。現在17年目で44名の隊員がいます。ごみ隊なので、隊長が1名、副隊長が2名います。リヤカーには1台に5人ずつ、トラックは8名で行動し、待機組は10名くらい。待機組は何をするかという、乗用車でゴミを持ってきた人の分別や、リヤカーで回収したゴミの仕分けを手伝っています。名簿にある高齢者全員もれなく回収が終わるまで、ゴミが出てないかとかのチェックもしてから解散します。月2回以上ゴミが出ていない場合は民生員に報告し、民生員から連絡をもらうシステムをとっています。その後、乗用車に詰めないベッドやタンス、剪定くずといった粗大ゴミを依頼が来た順に回収していきます。毎回13件ほど依頼があるので回収します。全員の安否・安全確認ができれば解散です。

我々は地区の下部組織なので、レンタカーや手袋は区の予算を使わせてもらっています。あつてはならないですが、万が一不慮の事故があったときのために、区の保険への登録等も行いながら活動しています。詳しくは2020年2月の広報ふくつで特集されていますので、是非そちらをご覧ください。





チーム53について

高齢者宅のゴミ回収、コミュニティレベルでの誰一人取り残さない精神が反映されている点、地道に9年以上活動してきた実績、この活動をこういう場で取り上げることこそが、この賞の本質なのではないかと思います。



Hayashi

私も高齢者のゴミ問題は大きな社会課題と感じています。しっかり地道に継続性のある形で運営しているところがSDGsにぴったりだなと思いました。



Shimomura

次の視点!

地域の担い手候補となり得る方々が集っている印象ですので、その方々をよりプレイヤー・プロデューサーへと育成していけると広がるのではないのでしょうか。また、この仕組みを活かして、回収物を利用したフリーマーケットなどを開催し収益を挙げて、持続可能性を高めてみてはいかがでしょうか。

表彰は逃しましたが、素敵な取り組みがたくさんありました。

《活動概要》

食品ロスの削減と共に行う、貧困をなくし、全ての人に健康と福祉を届ける活動をしています。



《活動概要》

化学農薬や化学肥料を使わないで、アレルギーを含む誰でも食べられる野菜を作れる人を育成し商品も供給します。



《活動概要》

新型コロナウイルス感染拡大防止のため人の動きが制限され、福津市の産業も大きな影響を受けている。そこで、市民に市のよさを再確認させるとともに、市内での消費活動を促進させるために、中学生が地元福津市の産業について調べ、その成果を市民に向けて発信することが必要であると考えた。地元福津市の産業を活性化させることで、今後も住み続けられる、そしてさらに発展していく福津市づくりを実現しようとした中学生の活動である。



《活動概要》

総合的な学習の時間において福間の海岸や松林の保全活動の必要性などを理解し、自分たちにできることが何かを考え、実践にまでつなげることができた。



《活動概要》

人口の増加に伴い、高齢者の人口も増えてきている福津市において、5年生の立場で高齢者も笑顔に過ごすことが出来るまちづくり・地域づくりについて考える。



あなたの知っている福津市SDGsの取組を情報提供してください。



- いつもの通り道を定期的に整備・清掃している団体はいませんか？
- 海や森、松林などがキレイに清掃・保全されていませんか？
- 困った人に手を差し伸べている人や団体は知りませんか？
- 活動の規模に関わらず、心に響く活動を見かけたことはありませんか？

福津市SDGs未来都市
の取組についてはコチラ

